

長野県における温泉観光地に関する予察的考察

—— 山田温泉を事例として ——

石 澤 孝

I はじめに

バブル経済が崩壊し円の対ドルレートが低下（いわゆる円安）しつつある近年、高度成長期を契機として増加し続けた観光需要の変質がみられる。それまでの円高を背景とした海外旅行や長期的で値の張る旅行から、国内旅行を中心とする短期的で安価な旅行（いわゆる安近短）へのシフトである。なかでも手近な観光地としての温泉が、露天風呂や日帰り入浴施設の設置とともに再認識されつつある（第1表）。

「豊かな自然に恵まれたリゾート地」というイメージが強い長野県は、東京や名古屋という大都市から比較的近距离に位置し、観光の安近短時代以前から、大都市地域からの手近な観光地として親しまれていた。1998年の長野冬季オリンピック開催を控えた長野県では高速交通網の整備が行われ、東京や名古屋との時間距離がさらに短縮した。なかでも、長野新幹線の開業により最短時間で80分前後で東京と結びつけられた長野周辺地域では、今後様々な影響があらわれると考えられる¹⁾。これらのことを踏まえ、本稿では、長野県内における温泉観光地²⁾の特質をさぐるため、長野市の近郊に位置する山田温泉においてその一端を検討してみたい。

II 長野県における温泉地の特徴

1. 温泉観光地としての長野県

主な都道府県における温泉地数と年間のべ宿泊者数を示したのが第2表である。温泉地数では北海道が最も多く、長野県、新潟県、福島県、秋田県の順となり、面積の大きな道府県が上位に位置している。温泉地は、1軒しかない秘境の宿や数10軒もある大きな温泉地がそれぞれ1ヶ所と数えられるため、温泉地の数が必ずしも温泉観光地の規模をあらわすものではない。そこで、年間のべ宿泊者数をみると、北海道、静岡県、長野県、栃木県、群馬県の順となる。北海道を除くといずれも東京近郊に位置する県である。別府温泉や加賀温泉郷という有名な温泉観光地を抱える大分県や石川県をさしおいて、これらの県が宿泊者数の上位に位置していることから、温泉観光地が大都市住民の手近な観光地として利用されていることがうかがわれる。

なお、長野県には温泉地数が全国第2位の186ヶ所あり、また宿泊者数でも全国第3位の約900万人から利用され、全国有数の温泉観光地であることがわかる。

第1表 自分が考えている旅行の目的（複数回答）

項目	構成比
温泉に入る	57.4 %
のんびりとくつろぐ	51.4
美しい自然景観を見る	50.4
食事・ショッピングをする	45.5
史跡・博物館等を鑑賞する	33.4
家族と遊ぶ	31.2
大勢でにぎやかに過ごす	16.8
旅行先の伝統行事等に参加する	14.9
スポーツ・レクリエーション活動する	14.2
遊園地などで遊ぶ	11.9
お祭りなどを見る	9.3
その他	1.0
わからない	0.3

総理府広報室「余暇と旅行に関する調査（1994年）」より

第2表 温泉地の数と年間のべ宿泊者数（1996年）

道府県名	温泉地数	年間のべ宿泊者数	
		人数	順位
北海道	209	13,141千人	1
青森	135	1,910	23
岩手	74	3,070	18
宮城	38	3,225	17
秋田	109	1,980	22
山形	91	4,210	11
福島	120	6,830	6
栃木	61	7,755	4
群馬	78	7,470	5
神奈川	32	6,279	8
新潟	122	5,644	10
石川	66	5,653	9
福井	36	1,592	27
山梨	48	2,588	20
長野	186	8,995	3
岐阜	47	3,541	14
静岡	90	11,993	2
三重	36	1,895	24
兵庫	53	3,302	16
和歌山	42	4,059	12
鳥取	13	1,880	25
山口	55	2,211	21
愛媛	21	2,848	19
長崎	27	1,716	26
熊本	54	3,603	13
大分	54	6,357	7
鹿児島	69	3,407	15
全国	2,508	140,573	

「地域経済総覧」から温泉地数100以上または年間宿泊者数1,500,000人以上の道府県のみを抜粋。

第3表 長野県内主要観光地の延べ利用者数（1996年）

順位	市町村名	観光地名	利用者数	県内客比率	日帰り客比率
1	軽井沢町	軽井沢高原	7,810千人	14.7%	39.7%
2	長野市	善光寺	6,604	50.2	78.6
3	山ノ内町	志賀・北志賀高原	6,504	13.4	17.7
4	諏訪市	上諏訪温泉・諏訪湖	4,234	19.6	68.4
5	白馬村	白馬山麓	3,663	24.7	5.1
県計			101,420	30.8	57.7

長野県商工部観光課「観光地利用統計調査結果（平成8年）」より作成

表4 北信地方の温泉郷の利用者数（1996年）

温泉地名	利用者数	県内客比率	日帰り客比率
上山田温泉	11,827百人	52.5%	7.8%
戸倉・新戸倉温泉	4,095	52.4	9.5
高山（南志賀）温泉郷	7,124	37.9	32.2
湯田中渋温泉郷	18,510	29.8	10.4
野沢温泉	11,587	24.5	12.6

長野県商工部観光課「観光地利用者統計調査表（平成8年）」より作成

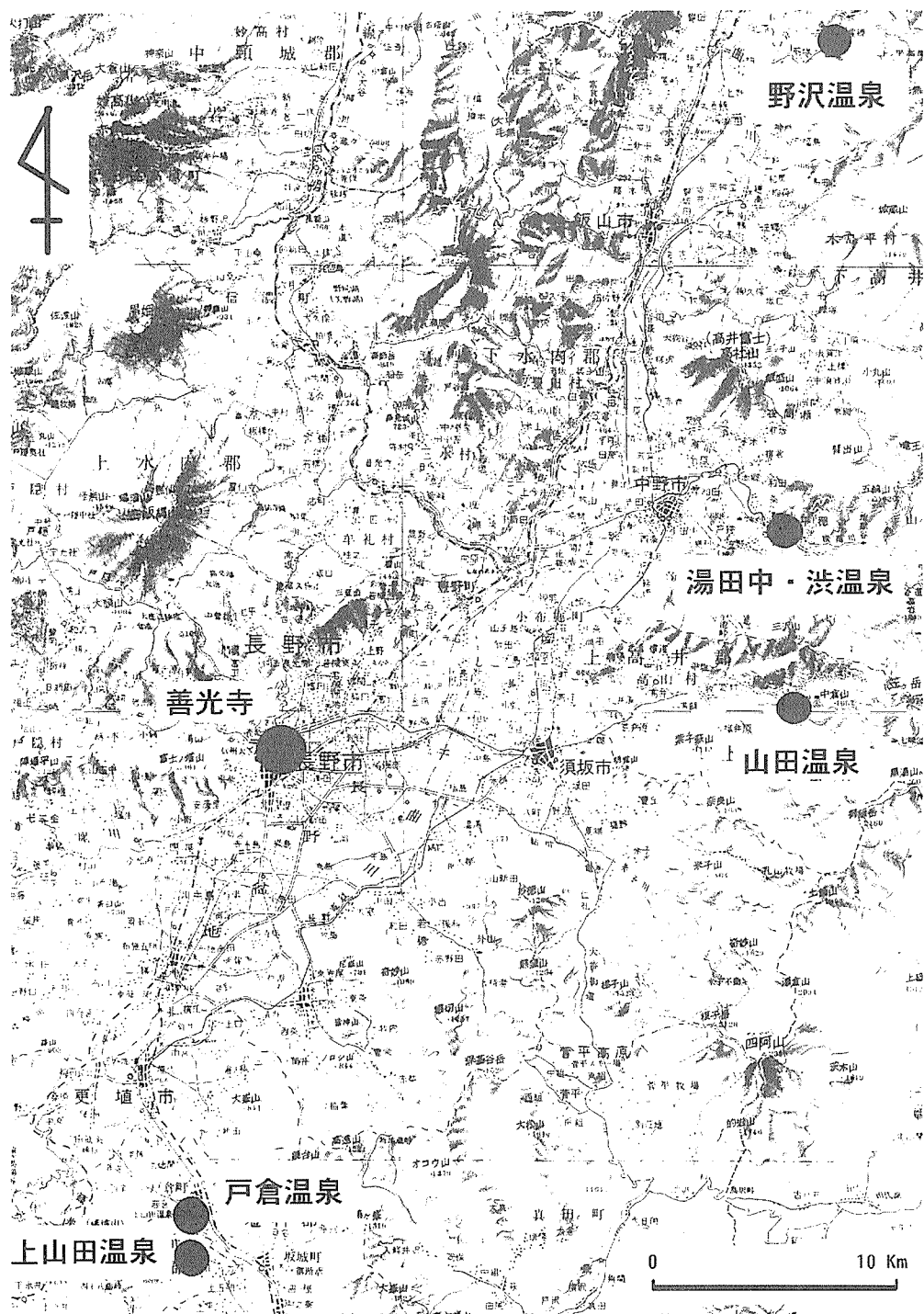
2. 長野県の観光地における温泉観光地の位置づけ

長野県内の観光客を安近短という観点から分析してみよう。観光客を県内・県外に分けてみると、それぞれ3,124万人（31%）、7,018万人（79%）と、県外客が県内客の約2倍強と多い。一方、日帰り客と宿泊客に分けてみると、それぞれ5,856万人（58%）、4,286万人（42%）と、県外・県内客の区分に比べてその差が少ない。このことは、県外からも日帰りで観光に訪れる客がいることを意味し、長野県の観光地が安近短的な旅行に利用されていることを推察できる。

主な観光地ののべ利用者数を示したのが第3表である。夏のリゾート地「軽井沢高原」や「善光寺」と並んで「志賀・北志賀高原」や「上諏訪温泉・諏訪湖」という温泉観光地を抱えた観光地が上位に位置しており、温泉観光地の重要性が確認される。

ところが、宿泊という観点からみると、善光寺や諏訪湖を訪れる観光客の宿泊比率がそれぞれ、21%、32%と著しく低く、両観光地における通過型観光地としての性格があらわれる。特に善光寺を訪れる観光客は県内の比率が高く半数を占めているとはいえ、約8割の日帰客すべてが日帰りするとは考えられないから、その多くは長野市周辺の宿泊型の観光地に宿泊していると推測される。長野市周辺の主な温泉観光地として、戸倉上山田温泉、高山（南志賀）温泉郷、湯田中渋温泉郷、野沢温泉がある（第1図、第4表）。これらの温泉観光地においては宿泊客の比率が90%前後と著しく高いから、善光寺の観光客の多くはこれらの温泉地に宿泊するのであらうと考えられる。

長野新幹線の開業による東京からの時間距離効果が特にあらわれるであらう観光地が、善光寺である。したがって、善光寺を訪れる観光客が宿泊するであらうと推測される長野市周辺の温泉観光地においても、今後大きな変化が生じるものと考えられる。



第1図 善光寺と長野市周辺の温泉観光地

ところで、5つの温泉観光地のなかで戸倉、上山田の2温泉地は、県内客の比率が高くまた宿泊客の比率も高いから、高速交通網の整備にともなう影響は他に比べ少ないと考えられる。一方、県外客の比率が高く、高速交通網の整備にともなう影響が生ずると考えられる3つの温泉地のうち、高山温泉郷では、日帰り客の比率も比較的高いという特徴がみられる。このため、本稿では、特に高山温泉郷の中核をなす山田温泉について、その特質を考察することにした。

Ⅲ 山田温泉街の特質

1. 山田温泉の概要

山田温泉が発見されたのは、1184年（元暦元）とされる。開湯は1619年（元和5）であるが、現在の温泉はその近くに1790年（寛政2）になってから開湯したものである。泉温は70度と高く豊富な湯量をほこっている。



写真1 山田温泉大湯



写真2 山田温泉

第5表 創業年と従業員数

創業年		従業員数		
		10人以下	11～50人	51人以上
	戦前		2	1
	戦後	4		

聞き取りによる。

当初の旅館数は7軒とこじんまりとしたものであったが、自炊式の湯治場として親しまれていた。これらの旅館は「大湯」を中心としてそれを囲むように配置されていたが、1945年の火災により温泉街の中心が全焼してしまった。このため、その反省に立って、桃山風の建築物として再建された公衆浴場「大湯」の前に公園を設けた、現在の配置となっている（写真1、写真2）。

戦後間もない頃は9軒の旅館があったというが、現在は休業中の1軒を除いて、7軒の旅館が営業を続けている。これらの旅館において1998年1月に聞き取り調査を行い、その実態を把握した。

2. 温泉街における旅館の特質

1) 旅館の創業年と従業員・駐車台数

現在営業している旅館は、土地・建物もすべてが自己所有であり、堅実な営業をしているといえる。創業年数は、藩政期に創業したと答えた3軒と、戦後に創業したと答えた4軒に大別された。

また従業員数から、常時20人以上を雇用している規模の大きな3軒と、10人以下の4軒に大別される。これらの規模の大きな旅館はすべて藩政期に創業した旅館であり、戦後に創業したものは規模が小さいという傾向がみられる（第5表）。正社員とパートとの関係をみると、小規模な1軒を除いて正社員の比率が高い。旅館の規模が小さくなるほど、忙しい時の補助的な役割を受け持つパートの重要性が増すようである。また、大規模な旅館では社員寮を設けているため、山田温泉に勤める従業員のほとんどが高山村内の住民となっている。

休日に関しては、藩政期に創業した大規模な旅館では有給休暇制度があるのに対して、戦後に創業した小規模な旅館では客の予約が少ない時に休日をとるものがみられた。規模が小さい旅館では、従業員のやりくりに苦労しているようである。

また、駐車場に関しては各旅館で個別の駐車場を有しているほか、大型バス3台、普通乗用車35台を収容できる村営駐車場が設けられている。これらの駐車場は通常は十分な収容台数であるが、観光シーズンの土日には駐車できない車がみられる。午前10時台の便が無いことにあらわれているようにバスの便が良くないため、駐車場の対策は今後の課題である。

3) 旅館の後継者

全体的に経営者の高齢化が目立つなかで、藩政期から創業した旅館ではいずれも後継者と

第6表 創業年と収容客数

		収容客数		
		50人以下	51～150人	151人以上
創業年	戦前		2	1
	戦後	4		

聞き取りによる。

第7表 設定最高料金と収容客数

		収容客数		
		50人以下	51～150人	151人以上
設定最高料金	20,000円未満	4		
	～40,000円		2	
	40,000円以上			1

聞き取りによる。

なる若夫婦がみられ、将来の不安は少ない。一方、戦後に創業した旅館でも1軒を除いて後継者がおり、将来に期待がもてる。ただ、後者の場合はいずれも30歳未満の未婚の女性であり、やや不安が残るといえなくもない。なお、後継者がいないと答えたのは、戦後に開業した旅館の中では規模の大きな旅館であり、先行きが危惧される。

4) 旅館経営規模と設定料金

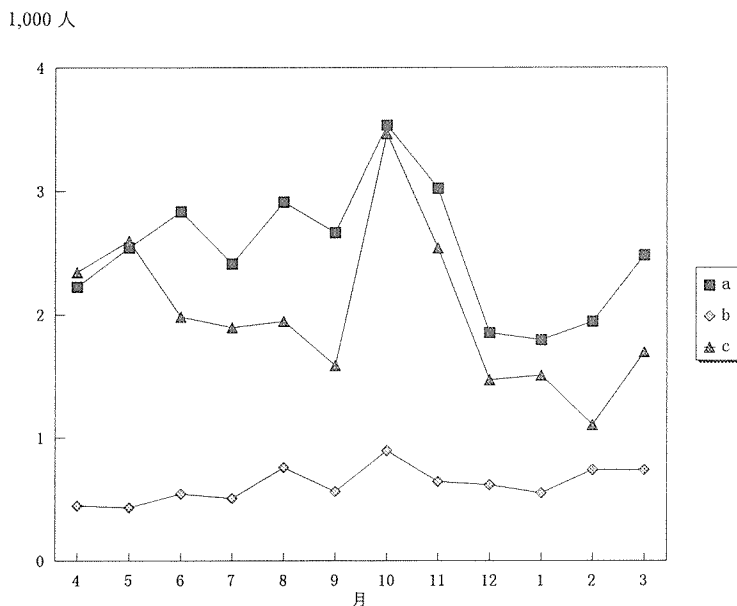
最大収容客数と部屋数をみると、藩政期に創業した旅館では収容客数が多く15～45部屋を擁しているのに対して、戦後に創業した旅館では収容客数が少なく10部屋前後であり、やはり前者の規模が大きい（第6表）。

営業規模と料金設定では、藩政期に創業した規模の大きな旅館の料金が高く、戦後に創業した規模の小さな旅館の料金が低いという明瞭な関係がみられる（第7表）。規模の小さな旅館では設定最高料金を1万円台におさえ、低料金で家族的なサービスということで集客をはかっているようである。

5) 利用客数の月別変化と経営状況

利用客数の変化に関する答えがあったのは3軒のみであったが、規模の大きな旅館（a, c）と小さな旅館（b）からの回答であったため、山田温泉の全体的な傾向を示すものと考えられる（第2図）。

月別客数に大きな変動がみられたのは、規模の大きな旅館である。紅葉の時期である10月をピークとしている。2番目のピークは若葉の季節である5月から6月にかけてみられる。規模の大きな旅館では団体客の比率が高く（第8表）、団体客の比率が低い小規模な旅館では月別の変動が少ないから、若葉や紅葉の季節の松川溪谷（写真3）観光に集中する団体客によるものであろう。なお、近くにスキー場があるにもかかわらず、シーズンの1月から2



第2図 宿泊客の月別変化 (聞き取りによる)

第8表 団体客の比率と収容客数

		収容客数		
		50人以下	51～150人	151人以上
団体客比率	30%未満	3		
	30～50%未満	1	1	
	50%以上		1	1

聞き取りによる。

月にかけての宿泊客が減少している。このことが山田温泉における今後の課題の一つであると考えられる。

経営状況に関しては不況のあおりを受けているようで、「売り上げが横ばい」もしくは「10から30%の減少」という答えが多かった。今後の対策としては、「設備投資をひかえて小規模に経営を行う」や「新たに客を特に開拓せず、固定客を大切にしていきたい」という堅実な考え方がある一方で、「もっと山田温泉の旅館がまとまって地域ぐるみで新たな客を集めていくべきである」という積極的な考え方も聞かれ、その調整が待たれるようである。

6) 日帰り客の比率と宿泊客の地域的客層

宿泊客の比率については、80%台という1軒を除くと、いずれも90%以上の高い答えが得られた。にもかかわらず、高山温泉郷において日帰り観光客の比率が高いのは、温泉街の中心に位置する外湯の「大湯」、そして山田温泉の近くに設けられた日帰り観光施設の存在によるものと考えられる。高山村には1988年に開業した「蔵温泉」や1993年に開業した「Y O



写真3 松川溪谷

「U遊ランド」など村営による日帰り観光施設が設けられた。これらの利用客により日帰り観光客の比率が高くなったのであろう。アンケートでは「これらの公共温泉の存在はそれほど影響がない」との答えが多かった。蔵温泉にはすでに宿泊施設が併設されているが、これらの宿泊施設が充実されて、宿泊と日帰りという棲み分けがうまくいかなかった場合、どのような影響が生じるかが危惧される。

地域的客層に関する答えが得られたのは、大規模な旅館に区分される1軒のみであった。年間を通して県内客が40%を占めているが、東京を中心とする関東地方（32%）や愛知県（8%）の比率も高かった。新幹線で結ばれる関東地方からの宿泊客の比率が高いことから考えると、山田温泉の将来は、いかにこれらの宿泊客を取り込むかにかかっているものといえる。

IV おわりに

以上のことは次のようにまとめられる。

長野県は全国でも有数の温泉観光地を抱えている。県内観光地の利用客を「県内・県外」、「日帰り・宿泊」という2つの観点から分析すると、比較的「安近短」な旅行に利用されていることが判明する。

県内でも有数の観光地の一つが善光寺である。観光地としての善光寺の特色は、県内観光客比率が長野県平均の31%を大きく上回る50%であること、日帰り客の比率が長野県平均の58%を大きく上回る79%であることに象徴される。つまり、典型的な通過型の観光地なのである。善光寺を訪れる観光客の8割すべてが日帰りするとは考えられないから、その多くは周辺の温泉観光地に宿泊するものと考えられる。長野市周辺に位置する5つの観光地のなかで、戸倉、上山田の2温泉地においては県内宿泊客の比率が高い。県外宿泊客の比率が高い残りの3つの温泉観光地のうちで、高山温泉郷は、日帰り観光客の比率が比較的高いという特徴を持っている。

高山温泉郷の中核をなす山田温泉は、旅館と外湯である「大湯」そして数軒の土産物屋か

らなる小規模な温泉街を構成している。歓楽街などが形成されない健全な温泉街である。その旅館は、藩政期に創業した3つの旅館と戦後に創業した4つの旅館とに大別される。前者には団体客を中心とする大規模なものが多く、後者には低料金で家族的サービス特徴とする小規模なが多い。いずれにしても1軒を除いて後継者が決まっており、将来に期待が持てる温泉街といえる。

山田温泉の宿泊客数には、若葉と紅葉の時期をピークとする季節的な変動がみられるが、これは団体客によるところが大きい。宿泊客の地域的客層としては、県内客が41%を占めるとはいえ、関東地方の宿泊客が32%に上り、今後における新幹線開業の影響が充分に予測される。

山田温泉の旅館では宿泊客の比率が高い。にもかかわらず、高山温泉郷において日帰り観光客の比率が高いのは、山田温泉のシンボルである外湯「大湯」と、近年設けられた日帰り温泉の公共施設によるものである。現在のところ、高山温泉郷における宿泊と日帰りという地域的な棲み分けがうまくいっており、日帰り施設による山田温泉への影響は少ない。しかしながら、今後公共施設の宿泊施設が充実した場合、この棲み分けが崩れて山田温泉に大きな影響が生じることが予測される。

山田温泉の今後の展望についての旅館の考え方は、堅実な意見と建設的な意見に分かれている。健全な温泉街ということは、松川渓谷と大湯の建物以外これといったものがないということである。このままでは、現状の維持はできても、さらなる発展は望めない。小規模な温泉街であり、また旅館間の経営格差が大きいからかえって難しいのかもしれないが、7軒の旅館が一体となった何らかの発展策を期待したいものである。

本稿を作成するにあたり、資料収集と整理に関して本学学生山口修司君の協力を得た。また、調査に関しては長野信用金庫の青木英吉・山口昇一氏（ともに信州経済地域研究会会員）や、関谷宣男氏をはじめとする山田温泉各旅館のご協力を得ることができた。以上の方々に、記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 石澤（1997）が、新幹線の開業にともなう長野市の都市機能の変化を予測している。
- 2) 温泉観光地について述べたものとして山村（1969a, b）などの研究がある。

文 献

- 石澤 孝（1997）：高速鉄道網の展開と地方都市の変貌。長野県地理学報告，1，13－18。
郷土出版社（1997）：『信州の温泉利用法』 郷土出版社。
高山公民館（1997）：『自然と人の笛合う村ふれあう村』 龍鳳書房。
山村順次（1969a）：伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能－温泉観光地の研究－地理評，42，295－313。
山村順次（1969b）：伊香保・鬼怒川における温泉観光集落形成の意義。地理評，42，489－505。

（1998年5月29日 受理）